

弔 辞

藤 井 讓 治 Joji FUJII

吉田城先生。

先生をこのように早く、思いがけない形でお送りすることになろうとは、夢にも思いませんでした。四月はじめに体調を崩されて、入院されたとうかがったときも、しばらくすればまたお元気に復帰されるものと、信じておりました。

それが、思ったより回復に時間がかかることがわかり、この際ゆっくり静養していただこうと思っていましたところ、ご容態が急変し、六月二四日夜、帰らぬ人となりました。

五四歳、あまりも若い冥土への旅立ちです。我々は何の心の準備もなく、ただただ途方にくれております。

吉田先生は、一九五〇年一〇月二一日、東京にお生まれになり、七三年京都大学文学部を卒業、その後東京大学大学院人文科学研究科修士課程、パリ第四大学博士課程、東京大学人文科学研究科博士課程を終えられ、七八年にパリ・ソルボンヌ大学で博士号を、また九四年に京都大学で博士号を授与されておられます。

一方、先生は、一九七九年四月、大阪大学言語文化部講師となられ、その後助教授に昇進、八二年フランス語学フランス文学の助教授として京都大学文学部に来られ、九四年教授に昇進されました。学内では国際交流委員会委員を長年つとめられ、また京都大学文学部とスイス・ジュネーブ大学文学部との国際交流協定締結に、中心的な役割を果たされました。

吉田先生の研究活動にはめざましいものがあります。ブルースト研究の国際的第一人者である先生は、フランスの研究者との交友が広く、その縁で、ブルーストの専門家のみならず、幅広い領域から多くの研究者が京都を訪れ、セミナーや講演に参加されました。また自らも頻繁にフランスでの学会やシンポジウムに招かれ、講演や報告をされています。

さらに先生は、様々な国際シンポジウムを中心となって精力的に開催されました。その主なものだけでも、一九九八年の日仏シンポジウム「エクリチュール

ル／フィギュール」、二〇〇三年の国際シンポジウム「境界なきブルースト」、二〇〇四年の国際フォーラム「ロラン・バルト多才の人」、二〇〇五年の日仏シンポジウム「対話としての自伝」などが思い浮かびます。

また「フランス文学における心と体の病理」「フランス文学における身体」など大型科学研究費の代表者として研究を主催されてこられました。

先生のこうした功績に対し、フランス政府から、一九九一年学術功労賞シュヴァリエ賞、九九年に学術功労賞オフィシェ賞を授与されておられます。

このように先生は、いままさに、研究者として油ののりきった時期にあり、これらの研究をいっそう推進していただきたかった私たちとしては、とても残念です。

このように思い出せば、吉田先生がいらっしゃらなくなったことを、信じたくありません。しかし、もう二度とお目にかかれなくなってしまいました。悲しい思いで一杯です。

吉田先生、安らかにお眠りください。

二〇〇五年六月二七日

藤井 譲治

(ふじい・じょうじ 京都大学文学研究科長)